

文学と人間研究

佐々木 誠

1. 最終講義

平成 16 年 3 月 6 日、北川先生の最終講義。教室には先生の最終講義を拝聴しようと、ゼミ卒業生・大学院・他大学の先生方・大学関係者の方々が多数集まっていた。タイトルは *to die to live — Hamlet's final selection*。おだやかな口調だが、鋭い洞察力と幅広い知識に裏打ちされた言葉には力がある。「ハムレットを何度読んでも、読むたびに新しい発見がある」という先生の言葉に、胸を打たれた。ご自分の研究を発表されているのはもちろんのことだが、それだけではなく、400 年もの間読み継がれてきた本にはそれ程奥が深く味わいがあると言うことを、改めて次世代の我々に語り継いでいるようだった。そして、世の中に文学のすばらしさを訴えていらっしやる様にしたのは私だけだろうか。文学に没頭し深く追求する先生のお姿を拝見し、懐かしさと同時に心が豊かになるように感じられ、久しぶりに *academic* な雰囲気の中で 90 分を過ごす事ができた。もう一度「ハムレット」を読み返してみたくなった。私自身、現在は私立高等学校英語科に勤務しているが、毎日の業務に追われ、大学時代に北川ゼミで研究した *Shakespeare* からは随分と遠ざかってしまっている。先生の最終講義を拝聴させて頂きながら学生当時を思い返しているうちに、先生の文学に対する姿勢には、英語教育への何かしらのヒントがあるのではないかと感じ

始めた。学生時代の北川ゼミを振り返ることで、それを探ってみたい。

2. ゼミの授業「文学は人間研究」

大学 2 年秋、3 年次からのゼミを選択しなければならない時期が迫っていた。大学に入学したときは、英語学専攻で英語の構造研究をするか、英文学専攻で英詩の研究の順でどちらかにしようと決めていた。しかし、1 年次に北川先生の講義を受け、先生の研究されている Shakespeare にも興味を持ち始めていたのも事実だった。ハムレット・ロミオとジュリエット・オセロー・マクベスの 4 大悲劇の題名とあらずじくらは知っていたが、内容をじっくり読んだわけではない。ましてや文学的なアプローチなど知るはずもない。これから充実した 2 年間で過ごすためにどうしたらいいのか、大変迷っていた。友人やクラブの先輩達からも、さまざまな情報やアドバイスを受けた。「北川ゼミはかなり厳しい」、これが当時の北川ゼミに対する大方の評価だった。最終的に覚悟を決め、北川ゼミの一員に入れて頂くことにした。先生の研究室に行くと、先生と先輩方に快く迎えられ、北川ゼミの 2 年間で始まった。

ゼミは金曜日の 5 限に設定されていた。90 分という授業時間の枠はあってないようなもので、時には 3 時間に及んだ。仲間内ではいつしか「魔の金曜日」と呼ばれるようになっていた。もちろん時間の長さだけでなく、量も質も我々にとっては大変厳しく、レベルが高いことは言うまでもない。

授業では、作品研究が中心であった。まずは Shakespeare の作品をひとつひとつ取り上げて、原文を読み進めていく。テキストを入手するにも The Arden Shakespeare、The Oxford Shakespeare (Oxford World's Classics)、The New Cambridge Shakespeare、The New Penguin Shakespeare シリーズでは同じ作品でもどう違いがあるのか教えて頂いた。

読み進めていきながら問題提起がされ、それをわれわれが考えていく形式だった。何度も何度も文章を読み込み、そこから登場人物が何を感じ、何を考えているのかを読み取ろうとする。そしてさまざまな視点から考えるため、時代背景、歴史、文化、神話、迷信、習俗、劇場の約束事等を調べ、その作品をより深く理解しようと努めた。隠喩、ことば遊び、謎々、劇的皮肉、等々も興味深い。また、同時代に書かれた Shakespeare 以外の作品もいくつか研究した。そして、愛、命、死、時間、友情、結婚、地理、劇中劇等、我々人間の日常生活のどこにでもありそうな問題をテーマとして取り上げて研究した。つまり北川ゼミの「学問」を一言で集約すれば、先生がよくおっしゃっているように、「文学は人間研究である」ということになるであろう。

3. 北川ゼミ課外活動 I 「2泊3日のゼミ合宿」

研究室での授業が中心であったが、屋外でのゼミ活動は我々にとっては楽しみの一つだった。夏には軽井沢の成城大学寮で2泊3日の合宿が行われ、1日中本と格闘した。A. C. ブラッドレイ「悲劇論」、「モルフィー公爵夫人」、「マルタ島のユダヤ人」などを夜遅くまで眠い眼をこすりながら読んだ事を記憶している。当時のノートを開いてみた。

悲劇論は第一講と第二講を取り上げている。

第一講 沙翁悲劇の本質

1. 悲劇構成の要素
2. 個人の行為性格及び偶発事件の意義
3. 主人公の偉大性と不可抗力
4. 不可抗力とは何か
5. 公正・審判ならびに悲劇の本体としての秩序

第二講 悲劇の構成

1. 大序 2. 争闘 3. 変化・抑揚・中休みの配置 4. 伎瞞と欠陥

これを分担して要点をまとめて発表し、全員で内容を検討していった。最後に自分で全体を通してレポートにまとめてある。Shakespeare 悲劇とはどんなものかという一つの指針を得た上で、再度悲劇を読むと、自分の読みとの違いが認識でき、それが新たな発見に繋がっていった。

「モルフィー公爵夫人」を読むにあたっては、登場人物の一覧表作成が大変興味深かった。その後の作品研究に大いに役に立った。漠然と物語を読み進めるのではなく、この表を作成することで、物語全体を客観的に分析することができた。誰が何幕何場で登場し、誰と関わり、何回登場しているのかなどがひと目でわかり、物語全体の構成を見渡すことができた。例えば、登場人物の一人ボゾラは、第1幕～第5幕の全18場の中で13場も登場する。彼は主人公ではないにもかかわらず、主人公よりも登場回数が多いのだ。このことは物語の中での彼の役割が、かなり重要であるということを示している。そして誰と会話をし、それによって劇やその他の人物がどう影響を受けたのか、筆者はボゾラに物語の中でどんな役割を与えているのか、などを考えるきっかけとなった。

このように、合宿では、普段のゼミで何回にも分けて取り組む内容を、集中的に学ぶことができた。そのための予習は大変なものだったが、シェイクスピア悲劇の本質や作品を研究するアプローチ方法を学び、これからの作品研究のための土台作りをして頂いたのだと思う。

4. 北川ゼミ課外活動Ⅱ「舞台観劇」

舞台観劇にも連れて行って頂いた。ビデオやテレビでの研究とはまた違って、実際にシェイクスピア劇がどう演じられているかを直に肌で感じる

ことは、我々学生にとってはとても有益だった。もちろん趣味や娯楽ではないので、楽しんだ上で、そこには必ず研究テーマを見いださなければならぬ。1年間に2~3の観劇をしたと記憶している。その中で特に印象に残っている劇が2つある。

1つは悲劇で、日本人の公演で劇団「円」上演の「ハムレット」である。自分にとっては初めての舞台観劇だった。ハムレット役は、現在もテレビ俳優として活躍している、橋爪功が演じていた。特徴的だったのは、観客席と演台の高さが同じで、その距離が1メートルもなく、目の前で演技が行われたことだった。俳優達の台詞を通して感情が直に体にぶつかってきた。俳優の汗も台詞を発声する時の唾も、とても美しく感じられた。独白の時の苦悩する表情や、台詞に込められた感情に圧倒され、気がつくや役者の息づかいと同じタイミングで呼吸をし、独白の時は同じように苦悩の表情になっていた。いつの間にかハムレットに感情移入をしていたようだ。それは劇が終わるまで続いた。演出や脚本などの特徴がどうだったかなど劇を分析をしたりすることはできなかったが、とにかく、興奮しながら帰宅の途に着いたことだけは記憶している。

もうひとつは歴史劇で、六本木俳優座で行われた「ヘンリー 4 世」である。あくまでも主筋はヘンリー 4 世の栄光と悲惨、そしてその死から皇太子ヘンリーの即位までではあるが、多くの研究者がフォルスタッフ論を発表しているように、傍筋でありながらフォルスタッフが魅力的な人物として登場する。そのフォルスタッフの劇中での役割に注目した。夏合宿で学んだ、主役以外の登場人物が全体にどのように影響を与えるのかを分析研究することも、劇全体を理解する上で大変重要であるのだ。彼が登場し、彼の一挙手一投足に、観客が反応する。悪いことをしたり死んだふりをしたりしても、どこか憎めない性格である。また、彼の登場で、その場の雰囲気も変わる。主役でない彼が、まるで劇全体を支配しているようだった。

舞台観劇後には必ずミーティングが行われた。同じ作品の劇でも演出家のさまざまな解釈によって劇の雰囲気が変わることや、仲間同士で意見を交換することができた。本を読んで研究するだけでなく、舞台観劇することで、よりその作品への理解が深まり、さらに様々な角度からのアプローチをすることによって、違った味が出てくることを学んだ。

また、作品の筋だけでなく、劇とは何かということも学んだ。『お気に召すまま』に *All the world's a stage* (2 幕 7 場) ということばがある。辛口の批評家ジェイクーズのやや斜に構えた台詞である。この台詞は、「世界劇場」というシェイクスピアの時代の主要な思想のひとつを表現している。当時は劇場内の役者と観客が一体となって劇を作り上げていた。劇は観るものではなく、聴くものだった。詩が生きていたのだ。観客にとっては聴くことを通して想像することが劇場での主要な楽しみであり、役者のことばを通して聴衆はいろいろな世界をこころの眼で観た。そして役者側が演ずるだけで舞台が成立するのではなく、観客との相互作用で舞台を仕上げる。それが、演技している劇場でなくても、日常生活のどこでいても劇場が成立するという考え方が、「世界劇場」であった。

学生当時は劇を教育とは直接結びけて考えることはなかったが、ことば(文字や音)からいろいろな世界を想像することや、自分が様々な場所で役者を演じていること、観客が単なる傍観者でないことなどを考えることは、現代の教育問題や社会問題に通じる所があるのではないだろうか。

5. 卒業論文「ゼミの集大成」

4 年生になると卒業論文に取りかかった。英語で 30 枚以上が規定だった。北川先生はこの卒業論文を大学 4 年間の集大成と考えており、我々は 3 年次の下地作りを踏まえて春には題材を決め、残り 9 ヶ月をかけて卒論

に取り組んだ。

まずは道具を揃えることから始まった。これは現在とはかなり勝手が違う。当時は、ワープロ・パソコンがほとんど普及していなかったのも、手動タイプか電動タイプを使って英文を書かなければならなかった。そして電動タイプを持つ人はほとんどおらず、たいてい手動タイプを使っていた。インクリボンも予備が必要だし、何よりも大変だったのは、タイプミスをする、そこは修正液で修正をしなければならず、場合によっては1枚全てを打ち直す必要があった。文字間隔、行数設定なども手動で行った。タイプをしてわかったことだが、英語ではアルファベットの“a”と“s”、“t”と“h”が大変よく使われる。ところが、左手の小指と薬指は人差し指や中指に比べて当然あまり力が入らない。手動タイプなので、力の入れ具合で文字の濃さが決まってしまうから、“a”と“s”を打つときはかなりの力を必要とした。仕上げの紙は丸善のワープロ用紙。少し厚めの紙だ。これにきれいに清書して提出し、製本されて返却される。

次に題材選びと論文の構想を立てた。まずは各自が論じる作品を決定し、テーマを見つけることから始まった。何度も原文を読んでテーマを探した。今までのゼミで行われてきたように、他人の論文を読むことでそこに自分の読みとの比較が生まれるので、質の高い論文を何冊も読んだ。登場人物の一覧表を作り、時代背景、歴史、文化、神話、迷信、習俗、劇場の約束事等を調べた。隠喩、ことば遊び、謎々、劇的皮肉、等も授業ノートやメモを参考にした。作品のテーマは原文からしか出てこないのも、大切なことをメモしながら原文を繰り返し読んで、テーマやキーワードを見つける努力を繰り返した。するとおぼろげながらテーマが見つかる。それを先生と相談し、テーマを絞って論文全体の構想を練り始める。

最後に、自分の意見をまとめ表現しなければならない。それにはパラグラフライティングをしなければならないし、自分の中に英語表現の引き出

しをたくさん持っていなければならない。これも大変な作業だった。今までいかに英語の知識を増やす努力をしてきたか、いかに英語の表現力を養ってきたかが問われた。

9ヶ月に及ぶ卒論作成では、寝ても覚めても絶えず卒論のテーマが頭の片隅にあった。食事中でも、遊んでいても、満員電車に乗っていても、気がついたことがあればその場でノートを取り出し、自分の考えをメモした。1ヶ月後に製本された自分の論文が返却されたときの充実感は、言葉にしがたいものだった。内容も表現方法も優れたものとは言えないが、苦しみ努力した結果であり、今でも自分にとっては宝物である。そして、惜しみないご助言をしてくださった北川先生には大変感謝している。

6. 北川ゼミ（人間研究）と教育

このように北川ゼミの2年間を振り返ってみると、「人間研究」をするための綿密なプログラムが施されていることがわかる。そしてこの「人間研究」こそ、今の教育や社会には必要なことではないだろうかということを感じている。

現在、教壇で教える機会に恵まれ、日頃高校生に英語を教えているが、生徒の想像力が著しく欠如していると感じる。英文を読んでも、頭の中で色々なことを想像しなくなっているのである。いや、できなくなっているのかもしれない。文章を読んでそれを日本語に直すことはできるが、内容を理解しているわけではない。だから英文を読んで何かを感じ、台詞からその発言者の人物像を想像したり、筆者の意見を理解し、批判し、あるいは同意し、それに対して自分の意見として述べることをしないのである。これは「英語」という教科に限ったことではないのかもしれない。

科学技術がめざましい進歩を遂げる一方、人間社会では人間関係が希薄

になっている。さまざまな原因があると考えられるが、そのひとつにことばの問題がある。情報化社会となり、意思伝達方法も変化してきた。確かにインターネットやメールの便利さは誰もが認めるところだが、人間がその発達のスピードについて行けなくなっているのではないだろうか。本来「ことば」には意志伝達の道具としての役割だけでなく、そこには体温があり、感情や意志を込めることができる優れた一面を持っているはずである。だから直接会って言葉を交わすことは、相手の表情や仕草、語気などから、お互い意思疎通をスムーズ、かつ正確にする。手紙も自筆の文字であれば、そこには相手の感情を感じることができる。しかし、機械文字は画一化されているため、「ことば」の持つ大切な部分が欠落する。情報を正確にスピーディに伝えるが、感情は伝えにくいということだ。だからメールなどに「絵文字」なるものが頻繁に使われ、それが使われていないと冷たく感じると訴える人がいるのだろう。そして何よりも、相手の顔が見えないから、自分の伝えたい気持ちを言い易く、また、悪口であればエスカレートしてしまう。これが事態をますます複雑にしている。そして、このような環境が想像力や表現力の乏しさを産みだし、やがては人間関係の希薄さにつながっていき、終わりのない悪循環になってるような気がしてならない。

文学を通して、つまりことばを研究することによって「人間研究」することは、人間社会で生きることにも繋がっている。しかし、文学には明確な答というものが存在しない。現代は、どんなことにもスピーディーに答えを出さなければならない、科学的思考が流行っている時代である。実用性のない、明確な答えさえない文学は、果たして現代社会には必要のないものであろうか。日本の英語教育は、随分以前からマスコミ等で酷評されてきた。「6年間英語を勉強しても使えないから、日本の英語教育は間違っている」と。教育行政も具体的にその対応をし始めている。小学校での英語教育が始まり、中学校の英語の授業では英語でのコミュニケーションが

重視され、高等学校教育カリキュラムにはオーラルコミュニケーションが必修となった。検定教科書も、読む・書くに重点を置くのではなく、話す・聞くを加えた 4 技能全ての分野に渡って学べるように構成されている。大学入試の変化も見逃せない。東大でリスニングテストが導入され、センター試験でも再来年度からリスニングテストが導入される。このようなことから、日本の英語教育が少しずつその方向性を変えていこうとしていることがわかる。教育現場で英語が「単なる受験の道具」として扱われることがなくなってきたことは喜ばしいことだが、実用面ばかりを重視する姿勢には少々疑問が残る。なぜなら、英語という教科は教育の一環で行われているからである。時間的な制約もあり、実技や技術を習得するだけなら、英語教育の枠でなくてもできるのではないだろうか。もちろん英語はことばであり、記号ではない。音声も大切であり、4 分野が揃って初めてことばとしての役割を果たすことになる。だから実用面が重要であるの言うまでもない。しかしだからといって、実用面よりも考えることを重視する、従来の読解中心の教育方法を全面的に否定はできないはずである。最近では、総合学習の 1 つの取り組みとして「国際理解教育」を扱っている学校が増えている。その中でコミュニケーションの道具として英語が重要な役割を与えられている。英語教育と「国際理解教育」の 2 つを完全に切り離すことはできないが、何でも英語の授業で扱うのではなく、英語にじっくりと取り組む時間と実用的技能を身につける時間を分けて学校教育で扱うことは、ひとつの解決方法ではないだろうか。

ことばは感情や情報を他者と共有するための道具である。そして、劇は虚構と現実の境界を無くし、新しい世界を作り出す力を持っている。想像力や生きる力を育む。「世界劇場」ではことばを使って誰かが役者として演じ、そして誰かが観客としてその劇を外から見ている。「人間研究」に焦点をあてた北川ゼミ方式は、教育には欠かせない想像力を養い、社会での生

きていくための人間関係を作る手助けをしていると言えるのではないだろうか。文学のすばらしさを教えてくださった北川先生に感謝すると共に、これからも教育の中で先生から受け継いだものを、また次の世代に伝えていく使命を全うできるよう努力していきたい。